仲間たちとレクリエーションを楽しんでは、ときにはノドにものをいわせて、このようにマイクの前に立つこともあつた、故松島さん。

かえうた

こんな男にだれがした

松島義信

これは、例の流行歌謡〝こんな女にだれがした〟のかえうたですが、さきほどすべてのCO患者の仲間に惜しまれながら、余りにもあっけなく他界していった故松島義信さんの作で、長女の小夜子さんが大事に保管していたものです。

（一）
好いて好かれてめおとになって
明るい未来を夢見たが
何の因果かガス吸わされて
いとしい女房が今日も泣く
こんな男にだれがした

（二）
ガスを吸わず昔のままに
おれが達者でいたならば
進学願うかあいいあの娘
のぞみかなえてやれたのに
こんな男にだれがした

（三）
老いのからだにタスキをかけて
今日も出てゆく座りこみ
このおれ一人を頼りにしてた
母の姿に涙ぐむ
こんな男にだれがした

（四）
夢も希望も捨ててはいない
この妻この子この母が
笑って過した楽しいわが家
きっとこの手で取りもどす
その日来るまでがんばろう

×

なおこのかえうた〝こんな男にだれがした〟の作者の松島さんは、あの昭和三十八年十一月九日の三川鉱炭じん大爆発のためCO患者となった人で、残念なことに去月十八日死亡した。CO患者で十一人めの死者で、あまりにもあっけない松島さんの死に対して、CO患者ならずとも唖然としている。

主婦会便り

ブロック別の中教審学習会

三池主婦会は今全会員に呼びかけ、〝統一ブロック学習会〟をすすめている。

こんどの学習会の目的は、主として現在民主教育上の重大問題となってきている、〝中教審〟答申のもつねらいを正しくつかみ、子どもの教育を正しくおしすすめようというもの。

すでに大牟田での学習会は八月中に終わり、いま荒尾側で、次の日程によりすすんでいる。

大谷ブロック＝十二日、宮内＝十三日、緑ケ丘（三地区に分ける）＝十四・十八・二十日、大平＝十九日、万田＝二十一日、西原・原万田＝十五日、大島＝二十六日。

こんどの学習には、大牟田・荒尾の両教組の協力によるもので、教育現場の教師の目がとらえた事実にもとづく切実な声が、何といってもこの重大さを母親たちに訴え、どこでも「本当の意味がわかってよかった」、とよろこばれている。

なお、荒尾教組ではこの学習会のために、スライドまで用いて説明する熱心さである。

敬老会は来月12日、柳川で

三池主婦会が例年主催してきた〝敬老会〟も、今年十一回目（最初は昭和三十七年十月十五日）を迎える。

これまで玉名温泉で行なってきたが、こんどは柳川市の〝柳川簡易保養センター〟。いっそうよい環境だという。

同主婦会は、一人でも多くのお年寄りが、昨年よりもより若返って参加されるように、と呼びかけている。

なお、敬老会の開催日は、きたる十月十二日（木曜）。

主婦会、政治局と交流

三池主婦会はその役員が、去る五・六の両日、大牟田と荒尾それぞれの政治局員との間に、よもやまの交流を行なった。

交流して見るとお互いに、かねて気づいていない重大問題のあることがわかり、主婦会運動にせよ政治活動にせよ、こんどに大いにためになったという。

なお荒尾関係の政治局員との交流の席で提起された問題は、近づいた市長選（来年）、フッ素やカドミュームによる公害発生、幼児保育――などだったと。

母親が変れば――歴史が新らしく

日本母親大会に参加して

七夕分会　中原千春

中原さん

「生命を生み出す母親は、生命を育て、生命を守ることをのぞみます」――のスローガンのもとに集った全国のお母さん方は、一万三千人をこえました。

私は〝三池主婦会代表〟として田中・本所支部長と一緒に参加させていただきました。

四十三もの多数にのぼった分科会の、どの一つをとってみても、私たちの進めている主婦会運動と関連のないものはなく、人間が人間らしく生きることへの追及が、現代社会ではこんなにも多くの問題をかかえているのかと、改めて考えさせられました。

私の入った〝中教審のねらいと民主教育〟という分科会は、いま重大な岐路に立っている教育上の焦点となっている中教審の問題だけに、参加者が三百人をこえるマンモス分科会場となりました。

元気いっぱいに生きていなければならないはずの子供たちが、遊ぶ暇もなく勉強に狩り立てられ、指圧をしながらの勉強。そしてまた指圧。このようなことで精神的にも肉体的にも蝕まれている事実や、クラスでリーダー格の五～六人の子供が授業内容を理解すれば、あとはかまわず次の課程へ進んでいき、とり残される子供たちは勉強ぎらいとなり、〝学校恐怖症〟となっていくことなどが、お母さんたちの間から真剣にだされました。

北海道の鈴木先生は、教組主催の研修会に〝平和〟に関するテーマをもって参加されたところ、自分の知らない間に解雇されていた、という人権侵害問題を訴えられ、熊本では日教組に入っている先生が約四割しかおられない現状などが説明され、〝民主教育〟を進めることのむずかしさがとり上げられました。

そのような民主教育を進めるために、私たちはどのような要求と運動を起こしていかなければならないのか。

東京のお母さんから、「母親がまず、どんな子供に育てたいか、を考えていかなくては、一方では中教審に反対しながらも、他方では中教審の方針を推進していることにもなりかねない」、との発言があり、私も「ここに参加した私たちは、参加できなかったたくさんのお母さんたちのことを忘れず、ここにだされた貴重な討議を伝え、ひろめていく義務がある」ことを訴えました。

また、地域運動の実状として、福岡では県教審答申によって、教育の機会均等であるはずの小学校制は廃止され、その主役である子供、教師、父兄の請願をまったく無視した学区制拡大が強行されたことや、中教審の問題にしても、ほとんどのお母さんたちは学習の機会もなく、先生の方も、それを積極的に説明しようとしない〝事なかれ主義〟が、この中教審答申をいつの間にか受け入れてしまうことになるのではないか、という意見をのべました。

最近は教科書の中から、戦争の暗いイメージを脱ぎ捨てようとしていますし、浜尾実著の〝女の子のしつけ方〟など、まったく逆コースとしか受けとれません。

耳をすませば、私たちの周囲に軍国主義復活の足音が、そくそくと迫って聞こえ、鳥肌の立つ思いが致します。私一人の、誇大妄想でしょうか。

この分科会では、一部のエリートをつくる一方、大多数は批判力のない労働者をつくることをねらった、資本家のための中教審答申に反対し、民主教育を進められる先生たちを、私たち母親が運動を仲間に間にひろげながら、強く支援していくことを確認し合いました。

翌日の全体会議では、丸岡秀子先生の記念講演があり、先生は「母親が変れば社会が変るといわれてきたが、今年は、母親が変われば歴史を新しくする、ということをつけ加えたい」「ベトナムに平和は訪れない」、ということを強調されたのでした。

福岡県として、〝カネミ油症患者に完全な治療と補償を〟と構成劇を通じて訴えましたが、この母親大会が「討論あって運動なし」といわれないよう、明日から運動に取りかかることを心に誓って、大会を終わりました。

×

なお日本母親大会については、前号でもお伝えしておりますからご参照下さい。――編集部

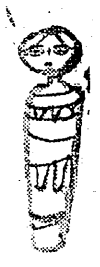
地評文化祭準備へ

三池労組文化祭も共に

来たる十月二十一～二十二日の間大牟田地評は、昨年にひき続いて〝第二回文化祭〟を開催する準備をすすめている。

会場は例によって市民会館。盛られる内容は、演芸、写真、書画、生花、盆栽、金魚、囲碁、将棋、それに俳句や短歌会など。同地評は、昨年にも増して力作が寄せられるよう呼びかけており、必ずや注目を集めるものとなろう。

なお、三池労組も前例にならって文化祭を開催するが、大牟田地評ともよく意志統一のうえ、同地評主催の文化祭のなかにもちこもうという方針。従って、一件案となっていた〝三池と水俣の交流美術展〟も、地評文化祭と組んで開催の運びとなろう。



明日も頑張ろう

若葉分会　猿渡ハギエ

思い出したくはないけど、今年もまた九月二十八日がくる。憎い九月二十八日だ。

時期的には夏が終わり、秋の始りでさわやかな時だけど、私のようなCO被災者の家族はとても嫌な思いの九月だ。

毎年のこと、今頃になると日記を出して読み返してみる。三月一日

昭和も、四十七年になった。辛い人生だ。けわしい道のみ続く。何もかもなげ出してしまいたくなる日もあるが、やはりこの息の続く限りは前進しなくてはならない。

頑張ろう。息ある限り。親のため、夫のため、娘のため、そして何よりも己れ自身のために。私どもの要求を、三井鉱山が全部果してくれる日までは。

夫が全快する日まで、闘い続けてゆこう。もし全快がのぞめないなら、せめてそれに近い状態になってほしいのだ。

坑内火災当日、会社は何らの連絡もしてはくれなかった。近所の人々の話で事故が発生したことを知り、急いで三川鉱までかけつけたものだったけど、あのときの辛かった気持、やりばのなかった憤りは、いまも私は忘れない。いや、終生忘れることはできないだろう。

それに、闘いは自分一人の闘いではなかった。沢山の、暖い同志の援助がいつもあった。それがあったればこそ、私たちは闘ってこられたのだ。

頑張り続けよう、明日もまた。

×

なお猿渡さんの夫の吉也さんは、九・二八坑内火災によるCO中毒患者の一人です。